

ずいそう

シーボルト事件の真相

松嶋憲昭



記録に残っている中で、最も被害が大きかった台風は、文政11年8月9日（1828年9月17日）に九州北西部に上陸し、有明海沿岸で猛烈な高潮を発生させた台風です。九州北部の諸藩の死者数は2万人に達しました。シーボルトの収集品を積み込むことになっていた蘭船コルネリウス・ハウトマン号が、この台風で座礁したことから、シーボルト台風と呼ばれています。

8月9日の深夜から翌朝にかけて、長崎は暴風雨になりました。シーボルトは、自宅の2階が壊れたため、平屋になっている玄関の荷物の間に身を潜めていました。家が壊れる少し前に気象観測をし、「気圧28時1分・気温華氏77度・湿度97度・東南の颱風」の記録を残しています。前日8日、晴天の日の記録が「気圧29時73分」となっており、これを平常時の平均的な気圧と仮定すると、台風通過時の長崎の気圧は950 hPa程度になり、非常に強力な台風であったことがわかります。

「蘭船を引き上げることができる者は申し出よ！」とのお達しがあり、最初に応募してきたのは3人の大工。ところが、慣れぬ仕事。作業が難航し、結局、失敗してしまいます。次に応募してきたのが、なんと時計職人の御幡栄三。時計屋のオヤジがする仕事とは思えないのですが、そこは機械の専門家、みごとに引き上げました。からくり時計づくりの知恵を活かして引き上げたのですが、「事実は小説よりも…」の感があります。

昔、歴史の時間に「引き上げた船の積み荷の中から伊能忠敬の日本地図が発見されて、シーボルト事件が起こった」と習った記憶があります。事件の経過を追ってみると、この説がかなり怪しいことがわかります。引き揚げの前に、シーボルトに地図を渡した幕府天文方の高橋景保が逮捕されているからです。

最近出版されている図書の多くは、事件の発端は「コルネリウス・ハウトマン号の座礁」ではなく「間宮林蔵の嫉妬」という説を紹介しています。

高橋景保の父の高橋至時は、伊能忠敬に測量法を教えた先生です。若くして亡くなったため、さらに若い高橋景保が幕府天文方を引き継ぎました。高橋景保は

エリート家系の超エリートでした。伊能忠敬は、孫のような高橋景保を「先生」と呼び慕っていたそうです。

一方、伊能忠敬の弟子の間宮林蔵は、下級の隠密で、乞食や現地人に変装して苦勞して調べた蝦夷地の調査成果を高橋景保に横取りされたため、高橋景保のことを嫌っていたようです。

ある日、高橋景保を経由して、間宮林蔵のもとにシーボルトからの小包が届きます。間宮林蔵は開封せずに奉行所に届け出しています。中身は、更紗一反と「間宮林蔵の業績を尊敬している」「北方の植物の資料があればゆずってほしい」という手紙。手紙の内容は問題なかったのですが、これを機に、奉行所がシーボルトと高橋景保の関係を調べ始め、ついに大事件に発展します。なお、高橋景保は、獄中で死亡したものの、その死体は塩漬けにされ、1年以上も経って、関係者の取り調べが終わった後に打ち首になっています。

「間宮林蔵は、規則に従って奉行所に小包を届け出ただけ」という好意的な説もあるのですが、私はこの説には賛成できません。シーボルトが高橋景保に接近していることは、間宮林蔵を含めた多くの関係者が知っていたはず。高橋景保が西洋の貴重な情報を入手する見返りにシーボルトに地図を渡したことも、薄々知っていたと思います。間宮林蔵は奉行所に訴え出る機会をうかがっていたのではないのでしょうか。シーボルトから届いた小包を奉行所に届け出るとき、いろいろな話をしたと思われます。高橋景保の違法行為を見過ごせないという気持ちもあったと思いますが、それ以上に、超エリート高橋景保に対する嫉妬があったのではないのでしょうか。事件の前年に伊能忠敬の孫の伊能忠誨が亡くなり、伊能家の血筋が途絶えたことも影響していると思います。

師を慕う伊能忠敬の強い希望で、伊能忠敬の墓は上野の源空寺の高橋至時の墓の隣にあります。脇に小さな高橋景保の墓があり、その近くに、幕末に再来日したシーボルトが建てた石碑があります。その石碑にはシーボルトの謝罪と後悔の言葉が刻んであります。